2004年度

卒業研究発表会予稿集

2005年1月31日(月):2月1日(火)

口頭発表会 於:9-349.9-353 教室

2005年2月1日(火)

ポスター発表会 於:上智会館第6会議室(5階)

上智大学 理工学部 物理学科

卒研発表会タイムスケジュール

1月31日(月)				
時間	9 - 3 4 9 会場	時間	9 - 3 5 3 会場	
10:00 ~ 10:10	開会の挨拶			
10:10 ~ 11:20	関根研(7名)	10:40 ~ 11:10	水谷研(3名)	
11:20 ~ 12:00	桑原研(4名)	11:10 ~ 12:00	高柳(和雄)研(5名)	
12:00 ~ 13:30		昼食		
13:30 ~ 14:40	後藤研(7名)	13:30 ~ 14:40	伊藤研(7名)	
14:40 ~ 15:50	江馬研(7名)	14:40 ~ 15:50	清水研(7名)	
2月1日(火)				
時間	9 - 3 4 9 会場	時間	9 - 3 5 3 会場	
10:00 ~ 11:00	大槻研(6名)	10:00 ~ 11:10	高柳(俊暢)研(7名)	
11:00 ~ 12:20	田中研(8名)	11:10 ~ 12:20	坂間研(7名)	
12:20 ~ 13:30	昼食			
13:30 ~ 14:00	ポスターセッション準備			
14:00 ~ 14:50	第一回ポスター(関根研、桑原研、水谷研、高柳(和雄)研)			
15:00 ~ 15:50	第二回ポスター(江馬研、後藤研、伊藤研、清水研)			
16:00 ~ 16:50	第三回ポスター(大	槻研、田中研、高村	卯(俊暢)研、坂間研)	

口頭発表会プログラム

1月31日(月)9-349会場

10:00 開会の挨拶 学科長

開相平(10:10 ~ 11:20)		É
関根研(10:10 ~ 11:20)		
A0174051	GaN ナノコラム結晶の顕微ラマン散乱	2
A0174061	GaN ナノコラム結晶の顕微ラマン散乱	3
A0174035	GdMnO ₃ のラマン散乱	4
A0174024	NaV ₂ O ₅ の低温高圧下におけるラマン散乱	5
A0174027	低温高圧下における帯磁率測定	6
A0174062	超伝導体の混合状態における磁束の運動	7
A0174007	超伝導体の混合状態における磁束の運動	8
桑原研(11:20 ~ 12:00)		
A0074009	擬二次元層状 Mn 酸化物結晶のポンプ・プローブ測定	1(
A0174053	磁場中回転インサートによる物性測定	11
A0174046	RMnO ₃ 結晶の不純物置換効果	12
A0174002	RMnO ₃ 結晶の化学圧力および外部圧力効果	13

後藤研(13:30 ~ 14:40)				
`	遠西 淳	ランタン系高温超伝導体	15	
	佐々木 智三	La _{2-x} Sr _x Cu _{1-y} Zn _y O ₄ (x~¼)における磁気輸送特性 酸化物高温超伝導体 La _{2-x} Sr _x CuO ₄ の オーバードープ領域における超伝導状態	16	
	荒木 恭介	電子ドープ系高温超伝導体 Sm _{2-x} Ce _x CuO ₄ の Cu-NMR	17	
	知久 宏之	有機超伝導体κ-(BEDT-TTF) ₂ Cu(NCS) ₂ の 量子ゆらぎによる vortex 格子の融解	18	
	宮地 清志	フラストレートした擬二次元三角格子反強磁性体 Cs ₂ CuBr ₄ の NMR	19	
	齊藤 健浩	スピンギャップ磁性体 IPACuCl3 の NMR	20	
	井上 紘亨	量子スピン磁性体 N(H,D) ₄ CuCl ₃ の Cu/D-NMR	21	
江馬研(14:40	0 ~ 15:50)			
A0174015		光触媒機能を持つ anatase 型二酸化チタン薄膜の光学特性	23	
A0174034		ヘテロダイン検出法による四光波混合信号の測定	24	
A0174069		Wavelet 変換を用いたコヒーレントフォノンの研究	25	
A0174049		無機有機量子井戸物質の励起子分光	26	
A0174005		無機有機量子井戸物質の非線形光学応答	27	
A0174019		GaN/AIN 量子井戸のサブバンド間遷移の緩和過程	28	
A0174064		GaN/AIN 量子井戸の	29	
		サブバンド間遷移の非線形光学効果		
		1月31日(月)9-353会場		
水谷研(10:40	0 ~ 11:10)			
A0174068		C 言語を用いた水素原子、 調和振動子、アンモニア分子の波動方程式の解	31	
A0174048		クラスターの	32	
		クーロン爆発初期過程のシミュレーション		
A0174059		TOF 装置内でのイオン運動の	33	
		分子動力学シミュレーション		
高柳(和雄)研	F(11:10 ~ 12	:00)		
A0074006		Heitler-London 法による水素分子の記述 I	35	
A0074030		Heitler-London 法による水素分子の記述 II	36	
A0174079		分子軌道法による水素分子の記述Ⅰ	37	
A0174045		分子軌道法による水素分子の記述 II	38	
A0174063		Heitler-London 法と分子軌道法の比較	39	

伊藤研(13:30 ~ 14:40)		
A0174058	星の進化 Runge-Kutta 法による解法	41
A0174060	星の進化 Relaxation 法による解法	42
A0174008	遅い中性子捕獲反応による重元素合成	43
	太陽系組成比との比較	
A0174044	遅い中性子捕獲反応による重元素合成	44
	Implicit 法と Laplace 変換による解法	
A0174054	速い中性子捕獲反応による重元素合成	45
	Implicit 法による解法	
A0174014	速い中性子捕獲反応による重元素合成	46
	太陽系元素組成比の再現	
A0174018	速い中性子捕獲反応による重元素合成	47
	原子核質量モデルによる比較	
清水研(14:40 ~ 15:50)		
A0174003	ワインボトル型ポテンシャルの量子論的取り扱い	49
A0174066	相対論的模型による核物質の記述	50
A0174023	相対論的模型による原子核の核構造	51
A0174031	EPR 対と観測問題	52
A0174041	カイラル対称性の自発的破れ	53
A0174065	SU(3)バリオンの磁気モーメント I	54
A0174047	SU(3)バリオンの磁気モーメント II	55
1101, 101,	DO(3)/17-32 SPHARANGE 21-21 II	
	2月1日(火)9-349会場	
大槻研(10:00 ~ 11:00)		
A9974008	非一様磁場カオス系の数値的研究:古典計算	57
A0174026	非一様磁場カオス系の数値的研究:波動関数	58
A0174040	非一様磁場カオス系の数値的研究:	59
10151000	磁気抵抗のフラクタル性	60
A0174032	ランダムレジスタネットワークのスケーリング	60
A0174016	磁性体中での電気伝導	61
A0174033	超伝導を記述する BdG 方程式の固有値の性質	62
田中研(11:00 ~ 12:20)		
A0174036	低エネルギー電子衝撃による	64
	C ₃ F ₆ の弾性散乱微分断面積	
A0174043	C ₃ F ₆ の低エネルギー電子分光	65
A0174021	COF ₂ の低エネルギー電子分光	66
A0174017	低エネルギー電子衝撃による	67
	H ₂ O の電子励起過程の研究	
A0174057	CH ₄ 分子の電子衝撃による CH ₃ ラジカル生成	68
A0174070	低速 O ⁵⁺ -He 衝突における一電子および	69
	二電子捕獲過程の研究	
A0174081	低速 N ⁵⁺ -He 電荷移行反応における	70
	衝突エネルギー依存性	
	国人ニュット・「以口に	

2月1日(火)9-353会場

高柳(俊暢)研(10:00 ~ 11:	10)	
A0174056	冷却型8重極線形イオントラップの開発	设計 73
A0174082	冷却型8重極線形イオントラップの開発	性能評価 74
A0174039	レーザー冷却された Ca ⁺ イオンによる	75
	クーロン結晶の観測	
A0174011	表面電離法とレーザー誘起蛍光法による	76
	金属原子ビームの強度と広がり角の診断	
A0174076	電子衝撃による He 2s ^{2 1} S 二電子励起状態からの	D 77
	自動電離スペクトル	
A0174010	Li ⁺ イオン衝突による Ne および Ar からの	78
	放出電子スペクトル	
A0174083	Li ⁺ イオン衝突による Ne の二電子励起と PCI 交	効果 79
坂間研(11:10 ~ 12:20)		
A0174080	電気磁気効果を示す遷移金属酸化物薄膜の諸物	7/性 81
A0074054	基板の表面処理効果と遷移金属酸化物薄膜の物	3 1
A0174004	電子ドープ銅酸化物高温超伝導薄膜の	83
710171001	物性へのバッファ層の効果	0.5
A0174042	遷移金属酸化物表面の SPM 観察	84
A0174028	酸化物表面への電極形成	85
A0174075	二酸化チタン薄膜の光触媒活性の	86
1101/10/3	スパッタリング条件による変化	00
A0174025	Mo 表面からの電子回折	87
1101/7045	MIO 公田UJOV电 J EIN	0 /

ポスター発表会

(13:30 ~ 14:00) ポスター発表会準備 (13:30 9号館ピロティー集合) (14:00 ~ 16:50) ポスター発表会

時間 登壇者

14:00 ~ 14:50 関根研、桑原研、水谷研、高柳(和雄)研

16:00 ~ 16:50 大槻研、田中研、高柳(俊暢)研、坂間研

登壇者は自分のポスターの前で説明を行なうこと。 登壇者でない学生も会場で説明を聞くこと。



逐過物性研究室

















指導教員

後藤貴行 助教授 鈴木栄男 助手 大学院生

上田 真徳 藤原 崇雄





卒業研究生

· 井上 紘亨 宮地 清志

齊藤 健浩 荒木 恭介 遠西 淳

佐々木 智三 知久 宏之



研究背景 酸化物超伝導体 $La_{2x}Sr_xCuO_4(LSCO)$ は、母物質である反強磁性絶縁体 La_2CuO_4 の 3 価の Laを 2 価の Sr で置換することにより、ホールをドープしたものである。x=0.06 付近から超伝導相が現れ、x=0.15 で超伝導転移温度 T_c が最大となる(最適ドープ)。最適ドープより Sr 濃度の低いアンダードープ領域の x=0.12 近傍 (1/8 組成) において、特異的に超伝導が抑制される。さらにこの組成では超音波音速の増大や輸送現象の異常(ホール係数の急激な減少)が観測され、低温において長周期の反強磁性的な長距離磁気秩序が出現することが知られている。そして、これらの物性異常を増大させる因子が存在し、それは、

La を同じ3 価の希土類元素で置換して低温正方晶に構造相転移させること Cu を非磁性のZn で置換すること 磁場を印加すること の3 つである。

一方、最適ドープより Sr 濃度の高いオーバードープ領域の x=0.22 近傍 (1/4 組成) においてもわずかに 超伝導の抑制が起こり、Zn 置換によって T_c の低下が顕著になる。また、 T_c の低下する組成が Sr 濃度の低い組成へシフトすることが報告されている [1]。 そして、1/8 組成で明瞭に観測される音速に対する磁場効果が 1/4 組成でも観測されることが見出されている。

本研究では、1/8 組成と 1/4 組成の物性異常の関連性もしくは 1/4 異常そのものの起源について知見を得ることを目的として、Zn 置換試料 $La_{2,x}Sr_xCu_{1,y}Zn_yO_4$ (LSCZO) における超音波音速に対する磁場効果とホール係数の温度依存性の測定を行った。

実験方法 試料は通常の固相反応法により作製した 多結晶試料 (x=0.18 ~ 0.22・y=0.005) を使用した。 超 音波音速は 10 MHz 帯の縦波を用いた位相比較法により測 定を行い、ホール係数は磁場反転直流四端子法を用いて、 12 T 中で 100 K から温度を下げながら測定した。

実験結果 LSCZO における電気抵抗測定により T_c の低下がx=0.195 で観測された(図3に実線で示す)。また、LSCO (x=0.22)での T_c の低下はわずかなものであったが、LSCZO (x=0.195)では T_c の低下が顕著になった。これらの実験結果は過去の報告例 [1]と一致している。 図1に0T中と12T中における音速の温度依存性を示す。 LSCO (x=0.22)で観測された磁場による音速の増大は T_c が低下する組成の T_c のはおりる音速に対する磁場効果は、 T_c が低下する組成の T_c の置換によるシフトに伴って消失したと考えられる。

図 2 に 12 T 中におけるホール係数 $R_{\rm H}$ と電気抵抗率 、電気抵抗率の温度微分 ${\rm d}\rho/{\rm d}T$ の温度依存性を示す。ホール係数は超伝導転移温度より十分に高い温度 \sim 60 K 以下の低温域において、高温域とは異なる別の電子状態が出現していることが強く示唆される。そこで、電子状態が変化し始める温度を定量的に把握するために、およそ \sim 60 K から 100 K の間でみられる直線的な温度変化からずれる温度 \sim 7 \sim 8回2 に示したように定義する。図 3 に \sim 7 \sim 12 T)を図 2 に示したように定義する。図 3 に \sim 7 \sim 7 \sim 12 T)の組成依存性を示す。 \sim 7 \sim 7 \sim 18 相成の場合と同様に超伝導を抑制する性質を持つと考えられる。

[1] N. Kakinuma *et al.*, Phys.Rev. B **59**, 1491 (1999).

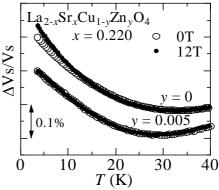


図1: 音速の温度依存性

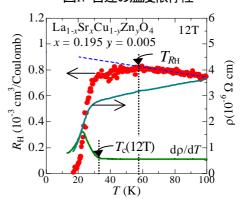


図2: ホール係数の温度依存性

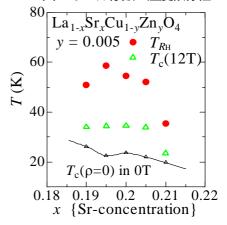


図3: TRHとTc の組成依存性

酸化物高温超伝導体 La_{2-x}Sr_xCuO₄ のオーバードープ領域における超伝導状態 低温物性研究室 A0174000 佐々木 智三

【はじめに】酸化物高温超伝導体 $La_{2-x}Sr_xCuO_4(LSCO)$ は、反強磁性絶縁体である La_2CuO_4 の 3 価の La を 2 価の Sr で置換することでキャリアとなるホールをドープしたものであり、超伝導になり電気伝導性を持つ CuO_2 面と絶縁体である LaOプロック層が交互に積み重なった 2 次元性の強い結晶構造を持つ。 Sr 濃度 x=0.06 付近から超伝導相が現れ、x=0.15 (最適組成)までは x が増加するにつれて超伝導転移温度 (T_c) は上昇するが、それ以降 T_c は低下し、x=0.30 付近では超伝導相が消失する。本研究では、磁束のピンニングポテンシャルと超伝導体積分率の測定から超伝導状態を調べることで、 Sr 濃度が高いオーバードープ領域では組成変化によってどのように超伝導相が消失しているのかを調べることを目的とする。【実験】試料は TSFZ 法により作製した単結晶の LSCO (x=0.21、東北大学金属材料研究所の山田グループから提供)を用いて、温度範囲 $24 \sim 42$ K、 $2 \sim 12$ T の範囲の磁場を CuO_2 面と平行にかけ、30mA (J_c : 臨界電流)の電流を CuO_2 面に垂直に流し、電気抵抗測定を行った。

【結果】図1は各磁場における電気抵抗率の温度依存性である。縦軸(抵抗)は対数、横軸(温度)は逆数で示した。電流が流れていない場合、磁束が熱的励起によって Boltzmann 因子 $\exp(-U/k_BT)$ に比例した確率でピンニングポテンシャルの山を飛び越えるが、臨界電流に比べて非常に小さい電流である場合も近似的に同じように考えられる。そのような磁場・温度領域を Thermally Assisted Flux Flow(TAFF)領域といい、その領域で電気抵抗率は、

$$(T) = \sup_{0} \exp[-U(H,T)/k_{\scriptscriptstyle R}T] \tag{1}$$

$$U(H,T) = U(H,0)(1 - T/T_c)^n$$
 (2)

と表される (TAFF モデル) [1]。ピンニングポテンシャル U(H,0)、 $T=T_c$ での抵抗。、指数 n をパラメーターとして変化させてフィッティングした結果を図 1 の実線で表す。それによって得られたパラメーターと、ピンニングポテンシャルの磁場依存性を図 2 に示す。指数 n=3 は、最適組成 x=0.15 の場合の n=1.5[2]と異なっている。一方、ピンニングポテンシャルは x=0.15 の場合[2]と比較して同程度の大きさと見積もられた。

電気抵抗測定では、電流と磁場に垂直な方向に 磁束が試料全体を動くことから、ピンニングポ テンシャルによるものだけでなく結晶欠陥や歪 の影響を受けて、実際よりも大きなピンニング ポテンシャルのように見積もってしまう。今後 は超音波実験で磁束の弾性定数を測定し、TAFF モデルを用いた解析によって本質的なピンニン グポテンシャルを見積もると同時に超伝導体積 分率を求める予定である。

[1]M. Suzuki *et al.*, Phys. Rev. **B** 41,13 (1990). [2]T. Hanaguri *et al.*, Phys. Rev. **B** 48,13 (1993).

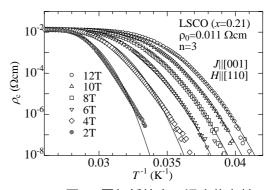


図 1. 電気抵抗率の温度依存性

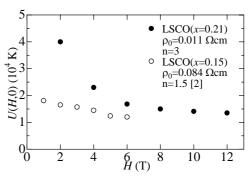


図 2. ピンニングポテンシャルの 磁場依存性

電子ドープ系高温超伝導体 Sm2-rCerCuO4の Cu-NMR

低温物性研究室 A0174000 荒木恭介

1. 実験目的

電子ドープ系銅酸化物高温超伝導体 $Sm_{2-x}Ce_xCuO_4$ は 2 次元 CuO_2 面を持ち、Cu-3d スピンが反強磁性を示す母物質 Sm_2CuO_4 の Sm^{3+} を Ce^{4+} で置換して電子をドープし還元処理したもので、Ce を少しずつ置換していくと $x\approx0.15$ 付近で反強磁性相から超伝導相に量子相転移する。 Sm^{3+} は 4f スピン(5 個)を持つため、本系は超伝導と磁性の両方の性質を示す事が特徴とされる。 Sm_2CuO_4 の 4f スピンは $T_N=5.95$ K で反強磁性転移し、磁気モーメントの大きさが $0.37~\mu_B$ (//c軸)でスピン配列は a-b 平面内で強磁性的であると中性子散乱実験により報告されている[1]。これは他の電子ドープ系超伝導体では見られない特殊な磁気構造である。同様に Ce をドープした超伝導相でも $T_N=4.9$ K で磁気転移している可能性が磁化測定により報告されているが、磁気構造及び超伝導との関係についてはまだ詳しくわかっていない。

モーメントの大きさに比べて T_N が極めて高いため 4f スピン間の相互作用は交換相互作用が支配的であると予想されており、もし伝導電子を介した RKKY 相互作用が存在しているとすれば、近藤効果と磁気転移が競合する新しい電子状態が生まれる可能性があり、興味がもたれている。本研究では $\mathrm{Sm}_{2-x}\mathrm{Ce}_x\mathrm{CuO}_4$ における 4f電子の磁性及び超伝導との関係を知る事を目的として $\mathrm{Cu-NMR}$ 表 1: 試料作成焼成パターンを用い実験を行った。

2. 実験方法

固相反応法を用いて多結晶試料 $Sm_{1.84}Ce_{0.16}CuO_4$ (T_C =15.3K)を作製した。表1より、融点直下の温度で焼成し、さらに十分高温で還元処理を行うことが超伝導を発現するために必要であることがわかった。

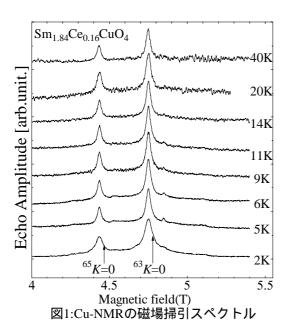
 $T_{\rm C}$ は直流4端子法を用い電気抵抗測定を行うことで決定した。Cu-NMR はスピンエコー法により $2K\sim40K$ の範囲で磁場掃引スペクトルを測定した。

仮焼 950 12h 本焼 1170 $12h \times 5$ パターン 1250 12h $(T_{\rm C}=15.3{\rm K})$ 950 90h Ar-anneal クエンチ約 36 分で常温 仮焼 950 12h パターン 本焼 1150 $12h \times 2$ 非超伝導 850 40h Ar-anneal

3. 実験結果及び考察

電気抵抗測定より T_{C} =15.3K と求められた(T=12K で抵抗ゼロ)。また NMR 測定の結果、四重極分裂の見られないシャープなピークが見られた(図1)。電子ドープ系では Cu に対する周囲のイオン配置から生じた電場 勾配とドープされた伝導電子からの寄与が打ち消しあうことが理論的に示されていることから、この結果は本 試料が確かに電子ドープされた超伝導体であることを示している。

図 1 より T<6K で Cu スペクトルのピークのすその部分に盛り上がりが見られた。この盛り上がりは Sm の磁気 転移によるものと考えられる。これは磁化測定の結果(T_N =4.9K)[2]とも一致する。また低温でもシャープなスペクトルが残っているのは $Sm_{2-x}Ce_xCuO_4$ において最近接に Ce 原子がドープされていない Cu サイト(\sim 51%)では Sm が Cu に対して対称的に配置されているので最近接の Sm の 4f スピン同士が打ち消し合い Cu は Sm からの磁場の寄与を受けないためである。逆に最近接に Ce 原子 1 つだけドープされている Cu サイト(\sim 36%)では幾何学的なキャンセルが起こらず内部磁場の変化が生じると考えられる。また $T>T_N$ ではマクロ磁化が大きな温度依存性を示す[2]のに対し、Cu スペクトルのナイトシフトには温度依存性がみられない



(図2)。これは高温でも強い反強磁性的な近距離相関が残っているためであると考えられる。

参考文献:[1] Sumarlin et al.:Phys, Rev, 68, 2228-2231

[2] Dalichaouch et al.: Phys, Rev, 68, 599-602

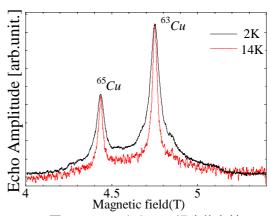


図2: Cuスペクトルの温度依存性

有機超伝導体 κ -(BEDT-TTF) $_2$ Cu(NCS) $_2$ は BEDT-TTF ドナー分子からなる 電子性の二次元伝導層と、陰イオンによる絶縁層とが交互に積層した結晶構造となっている。10.4K の超伝導転移温度は酸化物超伝導体と比べ一桁小さいが、擬二次元的な電子構造や広い磁束液体領域の存在など、酸化物超伝導体と酷似した特徴的な磁束状態を持つ系である。この系では約 $4T\sim7T$ の高磁場域において、約 1 K以下の低温においても抵抗のない磁束固体状態とならず、大きな量子ゆらぎにより、有限低抵抗状態の量子磁束スラッシュ状態であると報告されている[1]。また、高温域における熱ゆらぎによる磁束液体状態から量子スラッシュ状態へはクロスオーバーではなく相転移的に変化することが報告されている[1]。この系は非常に純良であり、二次元性が極めて強いことから磁束状態の研究にすぐれている。本研究の目的は磁束液体状態から量子磁束スラッシュ状態への転移によってどのような変化が現れるのかを H-NMR によって観測することである。

実験は東北大学金属材料研究所の小林研究室より提供された、電気化学的酸化還元法により育成された単結晶試料を用いた。同研究所の 15T 超伝導マグネットと上智大後藤研 6 T 超伝導マグネットを用いて H-NMR スペクトル測定とスピン格子緩和率 (T_1^{-1}) 測定を行った。

図1は低磁場域(Ho=1.011T)におけるスピン格子緩和率の 温度依存性である。2.1K 付近において臨界発散が見られる。 これはこれまでに報告されている磁束液体 - 固体転移温度 (約 2.1K)と一致している[1]。 臨界発散していることから二 次相転移的であると考えられる。

図 2 は高磁場域(H_0 =5.035T、4.579T)のスピン格子緩和曲線の初期勾配の曲率と関数 $I()=I_0(1-\exp(-(-/T_1)))$ の曲率が一致するように の値を決め、 値の温度依存性を示したものである。高温域では一定値であるが約1.3 K以下で急激に増大している。これは磁束液体状態からスラッシュ状態への転移を反映しているのではないかと考えられる。

図 3 は H-NMR スペクトルの温度依存性である。内部磁場の異なる 2 つのピークが観測された。低温になるほど低磁場側の成分(Sa)が高磁場側の成分(Sb)と比較して大きく現れる。1.1 K のスペクトルに示したように 2 つのガウス関数を用いてスペクトルを再現し、各温度での成分比を求めた。これを測定間隔を変えたスペクトルについても行うことにより、緩和率と成分比の温度依存性を評価した。その結果、1 つの可能性として、2 つのピークは磁束の固体相と液体相によるもので、低温ほど固体成分(Sa)が増え、液体成分(Sb)が

[1] T. Sasaki *et al.*,

Phys.Rev. B 66, 224513 (2002).

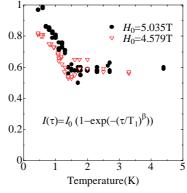


図2 値の温度依存性

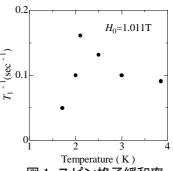


図1 スピン格子緩和率

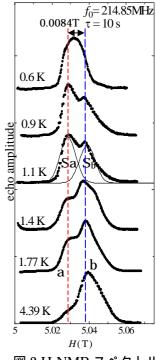


図3H-NMRスペクトル

フラストレートした擬二次元三角格子反強磁性体 Cs2CuBr4の NMR

低温物性研究室

A0174000

宮地 清志

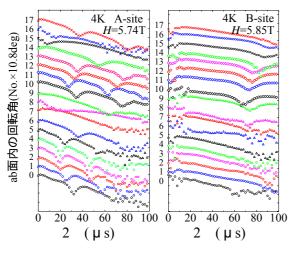
(はじめに) 擬二次元三角格子反強磁性体 Cs₂CuBr₄ は、bc 面内に Cu が歪んだ三角格子 $(J_1/J_2=0.467)$ を形成している。フラストレーションのため T_N は極めて低く(ゼロ磁場で $T_N=1.4 {
m K}$ に おいて秩序化)、スピン秩序の周期が結晶の格子定数と異なる(不整合)など特異な性質を示す (図 1)。また結晶構造は斜方晶(空間群 Pnma)で Cu 原子の近傍には Br が四面体的に配置され ており、ユニットセル内には結晶学的に異なる二つの Cs-site が存在している。強磁場中において は飽和磁化の 1/3 に磁化プラトーが存在し、プラトー範囲内ではスピン構造が整合に、範囲外で は不整合になることがわかっている。本物質の二つの Cs-site の同定を Cs-NMR により行う事、及 び 3d-スピンの静的及び動的性質を調べるためオンサイトの Cu-NMR の信号探索を目的とし実験 を行った。

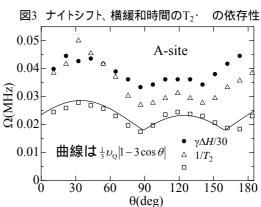
(実験) CuBroとCsBrの2:1の飽和水溶液から蒸発法(室温、一週間程度)により単結晶を作製し た。粉末X線回折で不純物が含まれない事を確認し、単結晶ディフラクトより結晶軸を決定した。 NMR測定は試料のab面を磁場と平行になるようにセットし、Cs核のシフト及びスピン横緩和時間 T_2 の、ab面内での磁場方位依存性を、磁場 $H \approx 6T$, 温度 $T = 4 \sim 20$ Kの範囲で測定した。

(結果) Cs-NMRの磁場掃引スペクトルでは、シフトの異なるCsの2つの信号ピーク(A.B-site)が確 認された。Cs核(I=7/2)の四重極分裂は非常に小さく $(-\circ \sim 0.02 \mathrm{MHz})$ 、それぞれのピーク内に内 包されている。図2は、磁場印加方向を変えて横緩和曲線を測定した結果である。単純な指数関 数ではなく、スピンエコー振動がはっきりと表れている。このエコー振幅のパルス間隔依存性を、 関数 $I(2 au)=A\exp(-2 au/T_2) imes\{\sin(2 au\Omega+\phi) imes\exp(-2 au/ au_0)+arepsilon\}$ でフィッティングを行い、ビートの周波数 Ω の値を求めるとほぼ $_{0}$ と一致し、この振動はCs核(I=7/2)の四重極分裂によるものだとわかった。 Ω, T_2^{-1} 及びナイトシフト Hの角度依存性を図3に示す。 Ω の角度依存性が四重極相互作用の角度 依存性 $\frac{1}{3}v_0|1-3\cos\theta|$ でフィッティング出来た。角度 の原点よりCs-siteにおける電場勾配の主軸 方向が決められる。これを点電荷近似によって求めた計算結果と照らし合わせることでCs-siteの同 定を行った。また磁気的な物理量である T_2^{-1} とナイトシフト Hも、Ωと同様の角度依存性を持つことがわかる。

Cu-NMRに関しては、磁場掃引及び回転スペクトル測定で (T=4.2~20K)Cuの信号は検出出来なかった(Csの信号強度 の1/1000未満)。緩和率の測定結果 $T_2^{\text{Cs}} \approx 30 \mu \text{s}$ 、 $A^{\text{Cs}} \approx 1.2 \text{T}/\mu_{\text{B}}$ を用いて、 $A^{\text{Cu}} \approx 10\text{T}/\mu_{\text{B}}$ と仮定すると $T_2^{\text{Cu}} \approx 0.4\mu_{\text{S}}$ と評価できる。 通常、NMRの測定ではτ≈10us程度が最小なので確かに検出 限界を超えている事がわかる。

参考文献 Fujii, et al. Physica B 346-347(2004)45-49 図2 Cs 2-siteの横緩和曲線





O Br

図1 Cs₂CuBr₄の結晶構造

Cs1

Cs2

スピンギャップ磁性体 IPACuCl3の NMR

低温物性研究室 A0174000 齊藤 健浩

IPACuCl3 は S=1/2 強磁性-反強磁性交替鎖系 $(F-AF \cite{F})$ の物質である。この系は2つの Cu の 3d スピン (S=1/2) がダイマーライズし、低温で S=1 のスピンとして振る舞うため、Haldane ギャップを観測できることから注目されている。実際、磁化曲線の測定から零磁場でギャップを有し、臨界磁場 $H_C=10.1\pm0.2T$,飽和磁場 $H_{Sat}=$ 約 40T であることが報告され[1]、 $H>H_C$ で磁場誘起磁気秩序が存在することが比熱測定によって確認されている[2]。Hida はF-AF系の Haldane limit $(J_F\to\infty)$ と dimer limit $(J_F=0)$ の間では量子相転移は起きないと理論的に証明している[3]。このため、マグノンのボースアインシュタイン凝縮が起こることが知られている TICuCl3 等のスピンダイマー系とこの

系との関連について興味がある。そこで、本研究では IPACuCl3 の磁場誘起磁気転移を調べるために、マクロ な磁化測定と共に、常磁性状態から秩序状態までの広 い磁場範囲における Cu-NMR 測定を行った。

IPACuCl3 の単結晶は蒸発法によって作製した。生成した単結晶試料の外形は直方体であり、その直交する3つの表面をそれぞれ A, B, C 面と定義する。各面と結晶軸は数度程度異なる。実験は東北大学極低温科学センターの 7T-SQUID 磁束計を用い、A面垂直方向に磁場印加し磁化温度依存性の測定を行った。そして東北大学金属材料研究所の 20T 超伝導マグネットを用い、スピンエコー法による NMR 測定を行った。

図 1 は各磁場における磁化の温度依存性をプロットした物である。この結果に Troyer の理論式をフィットすることで決定したエネルギーギャップをプロットしたものが図 2 である。 $TICuCl_3$ などのスピンダイマー系では、ゼーマン効果によって縮退の解けた第一励起トリプレットと基底シングレットとの間のエネルギーギャップが磁場の増加と共に H_C に向かって1次関数的に減少することが知られている。そこで、 $IPACuCl_3$ においても同じ振る舞いをするのではと考えた。しかし、図 2 の結果からは直線的に減少するのではなく、 H_C 付近で急激にギャップが減少することがわかる

図 3 は共鳴周波数 ω =132.3MHz, T=4.2K,磁場掃引 7~16T での磁場掃引スペクトルである Cu 核スピン (I=3/2)の低磁場側の satellite (I_Z =3/2 \leftrightarrow 1/2)のピークは、電気四重極相互作用(63 v $_Q$ =42MHz)による効果のみの数値解析とフィットする。しかし、center (I_Z =1/2 \leftrightarrow -1/2)と高磁場側の satellite (I_Z = $-3/2<math>\leftrightarrow$ -1/2)の Cu 核の信号は検出できなかった(11T 付近の2つのシャープなピークは測定プローブの Cu-Metal の信号である)。磁場誘起磁気秩序による内部磁場の増大によって center と高磁場側の satellite のスペクトルが wipe out したため、スペクトルが検出できなかったと考えられる。

参考文献

- [1] H.Manaka et al., J. Phys. Soc. Jpn. 69, 675 (2000).
- [2] H.Manaka et al., J. Phys. Soc. Jpn. 67, 3913 (1998).
- [3] K.Hida, Phys. Rev. B 45, 2207 (1992).

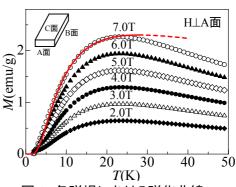


図 1 各磁場における磁化曲線。 曲線は低温での△における理論曲線。

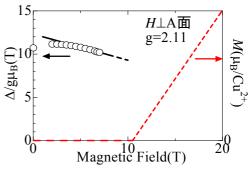


図2 エネルギーギャップ△の 磁場依存性。破線は磁化曲線[1]。

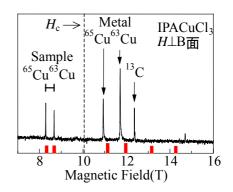


図3 NMRスペクトル 縦棒はCu信号の数値解析結果

量子スピン磁性体 N(H,D)4CuCl3の Cu/D-NMR

低温物性研究室 A0174000 井上紘亨

[はじめに] NH_4CuCl_3 が属する低次元量子スピン系の特徴は量子揺らぎが大きいため低温で磁気転移しにくい、磁気異方性が小さい、スピンが小さいということである。 NH_4CuCl_3 は単斜晶系(空間群 $P2_1/c$)であり Cu^{2+} イオンが二重鎖をなし、反強磁性ダイマーを形成して鎖同士で弱く結合した三次元スピンダイマー系といえる。同じ結晶構造である $KCuCl_3$, $TICuCl_3$ は基底状態がシングレットでギャップがあり転移磁場以上でトリプレットが誘起されギャップレスとなる。また磁場誘起トリプレットをボース粒子とみなすことができ実際、低温においてボース・アインシュタイン凝縮(BEC)が起こる。それに対し NH_4CuCl_3 は基底状態においてギャップレスとなっていて飽和磁化の 1/4, 3/4 において二段の磁化プラトーが存在し、プラトー外において低温で BEC が起こる事がわかっている。このように全く磁気的性質が異なる NH_4CuCl_3 についてはプラトーの発生原因、スピン状態が詳しくはわかっていない。そこで本研究ではプラトー内外でのスピンのミクロな構造を調べるため Cu/D-NMR スペクトル測定を行った。

[実験方法]単結晶試料 NH_4CuCl_3 , ND_4CuCl_3 は蒸発法により作製した(後者は東工大の田中研から提供)。実験は 6T 超伝導マグネットを用いてスピンエコー法による Cu/D-NMR スペクトルの角度依存性と温度依存性をプラトー内外の磁場域において測定した。

[結果と考察]Fig.1 は第一プラトー($5.4 \sim 14.0 \mathrm{T}$)とそれ以下の磁場範囲で結晶の b 軸を回転軸として a-c 面内で磁場を回転させ得られた Cu-NMR 信号のピーク位置をプロットしたものである。曲線は電気四重 極相互作用のみ(K=0)を考慮し数値解析を行った結果であるので Cu-NMR ではシングレットサイトのみを 観測していると思われる。トリプレットサイトはオンサイトの 3d スピンのゆらぎが大き〈観測できなかったと考えられる。また室温での結晶構造から点電荷近似によって計算した電場勾配テンソルの最大主軸方向は c 軸との角度が 74 。程度なのに対し低温での実験結果である Fig.1 では 52 。としてフィットしていること から大きな局所ひずみを伴った構造相転移が起こっていることを示している。

Fig.2, Fig.3 は D-NMR スペクトルの温度依存性を第一プラトーの磁場範囲において測定したものである。 温度依存性の異なる三つのサイト A_i , B_i , C_i が観測される。 A_i , C_i は温度依存性が大きいのでトリプレットサイトに隣接した ND_4 からの信号であると思われる。逆にほとんど温度依存していない B_i (2K =0)はシングレットサイトに囲まれている ND_4 からの信号と考えられる。このように磁気的に非等価なダイマーサイトの存在が常磁性状態において確認できた。またスペクトル分裂に表れたこれらの非等価ダイマーサイト(磁場

誘起トリプレット)は局在している事がわかる。さらに Fig.3 から A サイトのスペクトル中に細かい四重極分裂が 20 数本存在する事がわかる。これは静止したアンモニウムイオンの頂点の向きが連続的な分布では なく離散かつ有限個であることを示している。以上の結果から NH4 分子の向きが常磁性状態における非等価ダイマーサイトの形成と密接に関わっていると考えられる。

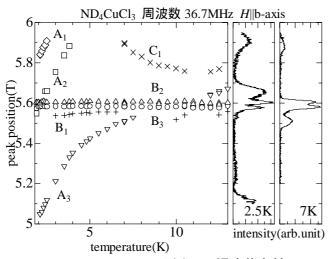


Fig.2 D-NMR スペクトルの温度依存性

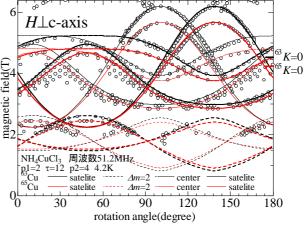


Fig.1 共鳴磁場の角度依存性

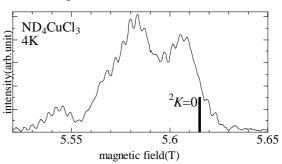


Fig.3 D-NMR スペクトルの拡大図